

# マツ共闘連絡会試結成へのマニフェスト

フランス文化研究会有志

明治大学新聞学会の編纂自治権獲得の闘いは、新聞学会編纂部と理事会との7・10団交による一応の成果（出版部理事の自己批判書提出）を現出せしめたのであるが、マツ共闘に秀加する我々としては、その内部的他者の目を持って眺めるならば、この団交そのものは単なる改良闘争、条件闘争でしかあり得ないものである。このことは団交の中で新聞学会編纂部の正統性を述べるに当って新聞学会規約を再考させなければならぬが、たゞしにも表われている。ここで対立されるべきは日本大学の新聞編纂部の諸君のことである。彼等は大学当局側のパージ正統性に対して、日本大学学生新聞を創刊したのであるが、その資金面の不充分性から有効な闘いを構築でき得ない状況にある。この間、日大当局は従来通りの大学新聞なるものをデッサン上げ、現在の右翼的体質を被い隠そうとせず、露骨な御用新聞を現出せしめていく。かかる状況を踏まえ今回の大新聞争いを捉えれば、新聞学会編纂部の諸君があくまで「大新聞」に停まり、当局のパーリメントに對して、編纂部の正統性を示すという行為については、これを我々は戦術的にしる評価をするものである。東大闘争が学部部処分の撤回という改良闘争から始り、たゞしを合戦考へるならば、そして新聞学会の闘争を現時点の改良闘争から大学解体への闘争を持った闘いであるとの認識の上、又もう一方の方向性を獲得せんがために我々はマツ共闘に参加するのである。現在のマツ共闘の総体そのものは「意味なき」クから革命的サークルを標榜して来たのであるが、そのプロレタリア性を止揚出来ずにある。我々の生存全行程をささえて来た思ひきプロレタリア性ゆえに、觀念的にも止揚段階には到らない。しかしながら「一」の實踐のみが、このことも困難で苦しい道を切り拓くものである事は確然たる事である。又このこと自体が困難で苦しい道である。

戦隊に入、ロクアクト体制といった物理的に作られた「サークル」の因襲状態、そのものは現象的には大新聞争いに係わる事によってある程度解決されたが、しかし大新聞争いが条件闘争であり、大学当局からの獲得、闘争を終るならば、それはサークルの崩壊された状況を真に突き破るものにはなり得ない。むしろ我々の期待を裏切るものとなる。現段階において我々に必要なのは、「大新聞争い」が改良闘争であるとの厳密な認識である。そしてこの厳密な認識をする事こそが、改良闘争を止揚し大学解体の闘争をもった日々新在在闘いを構築する手だてである。今秋に予定される学七値上げ、それに対する阻止闘争もまた、それ自体で闘われるなら個別改良闘争でしかあり得ない。我々はロクアクト体制崩壊の闘い、「大新聞争い」、学七値上げ阻止の闘いを有機的に結合させ現存する大学の秩序に對する敢然とした闘いに、集約させなければならぬ。このような学内闘争を闘いつつ、入管体制崩壊、評議院年返還闘争といったいかに学外問題とどのように闘いようか、といった課題は、69年の全共闘運動が学内での闘争と11月佐野重太郎上野争との合体のなかで崩壊していった過程を考へ合わせるならば、容易に解決のつく問題ではない。しかし学内問題を闘い、それ以上を考へ合わせるに用いられないという認識は絶対的に必要なものである。我々は以上のことを踏まえ、「大新聞争い」を止揚し乗り越えた徹底した勝利、闘いを構築する事を宣言する。

大新聞争いを「明大闘争」の原典とせよ！

全その闘うサークルはマツ共闘に結集せよ！

果てしない対抗力緊張関係を創り出せ！

各サークルは主体的に戦線を担い切れ！